

# 症 例

## 異常な発育を示した Verruca plantaris

沼田 稔<sup>1)</sup> 伊藤 憲雄<sup>1)</sup> 細江 志郎<sup>1)</sup>  
林 四郎<sup>1)</sup> 丸山 雄造<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 信州大学医学部第一外科

<sup>2)</sup> 信大附属病院中央検査部病理

### MALIGNANT PLANTER WARTS

Minoru NUMATA<sup>1)</sup>, Norio ITO<sup>1)</sup>, Shiro HOSOE<sup>1)</sup>,  
Shiro HAYASHI<sup>1)</sup> and Yuzo MARUYAMA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Surgery, Faculty of Medicine,  
Shinshu University

<sup>2)</sup> Central Clinical Laboratories, Shinshu University  
Hospital

Key words : 骨萎縮 (bone atrophy)  
再発 (recurrence)  
下肢切断 (amputation of lower extremity)

### 緒 言

疣贅, 外科外来診察室でしばしば遭遇するいわゆる“Verruca”は, 比較的安易に治療されている疾患である。本症が Virus 性の疾患であることは一般に認められているが, 全身に多発することもあり<sup>1)</sup>保存的療法を行っても再発を起しやすい上に, 少数とはいえ悪性化の報告もあり臨床より関心が寄せられるべきである。最近われわれは, 異常な経過をたどった足底疣贅で, 4回にわたり局所切除をうけたが再発をくり返し, しかも骨破壊をきたし, やむなく下肢切断を行った1例を経験したので報告する。

### 症 例

42才 男性

既往歴 : 5才の頃, こたつで両足踵部に熱傷を負い, その部に瘢痕を残した。

家族歴 : 特に記することはない。

現病歴 : 昭和49年5月, 右足底に小指頭大の硬い肝臓様の無痛性腫瘍に気付いた。腫瘍は次第に増大し, 某医を受診, スピール膏による治療を

受け, 腫瘍は縮少した。

昭和50年2月 : 再び腫瘍はクルミ大に増大した。

5月 : 同医で摘出術を受けた。

6月 : 同部に再び腫瘍出現し信大皮膚科を受診した。

10月 : 足底踵部の腫瘍の摘出術を受けた。

この後間もなく腫瘍が再発, 摘出をくり返している間に疼痛が増強, 自主歩行不能となり, 昭和51年6月当科外来を受診した。

当科受診時, 右下肢の足底中央に5.5×4.5cmの皮膚欠損部があり(図1)感染, 瘻孔形成を伴ない, 病的肉芽で覆われていた。肉芽の周囲には4個の白色, 硬, 小指頭大の腫瘍を伴ない, 腫瘍を圧迫すると肉芽面から白色泥状の内容物が流出した。同時に外顆下方にも小指頭大の褐色, 硬の皮膚腫瘍が2個認められた。足部X線単純像には顕著な骨萎縮があり, (写真1)血管造影像では, 外側足底動脈は足底面へ向って圧排され, また部分的狭窄像が腫瘍に一致して認められ, 足根骨下面においても動脈内径の狭少化, 途絶

異常な発育を示した Verruca plantaris

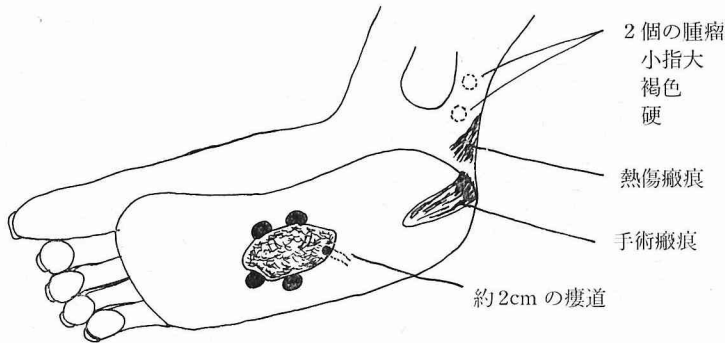


図1 足底のほぼ中央部に約 5.5×4.5cm の皮膚欠損部その周辺に皮膚、一部肉芽組織でおおわれた腫瘤 小指頭大、白色、弾性硬、境界不鮮明、圧痛



写真1

像、無血管野が認められ、(写真2)また、静脈相でも、足底肉芽創の部分と、足根骨下面においても静脈内径の狭少化、途絶像があった。

昭和50年7月に足底部腫瘤の摘出術を行ったが、被膜でおおわれた腫瘤の一部が足底筋内にまで入り込み、足根骨骨膜との間に軽度な癒着が認められた。摘出した腫瘤は全体が白色の被膜でおおわれ、酒かす様

の内容で充満されていたが、組織像には疣贅に特徴的な細胞の空胞化などは認められなかった。

術後、プレオマイシン隔日 15mg の全身投与を15日間にわたり行ったが、肺野の線維化が出現してきたため、総量 225mg で中止し、経過を観察していたところ、術後1ヶ月間にわたって腫瘤の再発もなく疼痛も軽減し、歩行も可能になった。ところがその後、足底に再び腫瘤が出現し疼痛も強くなり腫瘤の再発が確認されるとともに、第IV中足骨及び立方骨に骨破壊像が認められたため、本学整形外科において下腿下1/3の切断を受け、術後の経過は良好である。(写真3)

考察、結論

Verruca は本来良性の疾患で、しかも比較的頻度の高い疾患の一つであり<sup>3)</sup>、一般外科あるいは皮膚科外来診療室などにおいて治療が行なはれている。横山、里山、後藤<sup>4)</sup>らの他の統計によれば、本症患者は皮膚科外来患者の2%程度とされており、16~25才位の両性いずれにも好発する。また疣贅治療研究班<sup>5)</sup>の報告によれば、上田は一小学校の全児童中14%のいぼ保有者を報告し、石川は、外来患者 15354 名の0.43%に扁平疣贅保有者があり、男女比は1:2、年齢は30才以下が86%をしめることを報告している<sup>10)11)</sup>。なお本症の治療法としては、矢追抗原局所注入、腫瘤の焼灼、プレオマイシン局注など多岐にわたっている<sup>6)-18)</sup>。

多数の Verruca の中に本症例のように、臨床上異常な発育を示した例があることは、Gardner らや Kattan らによる報告例からうかがわれ、わが国においても高木<sup>1)</sup>、渡辺<sup>20)</sup>、高橋<sup>21)</sup>らにより少数例ながら

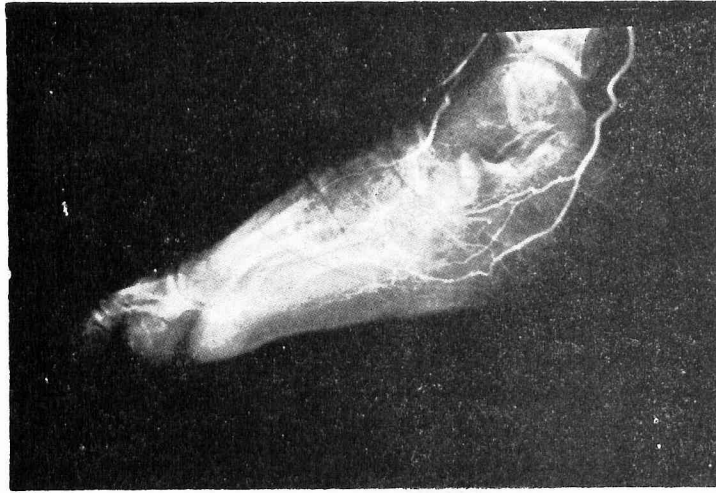


写真 2

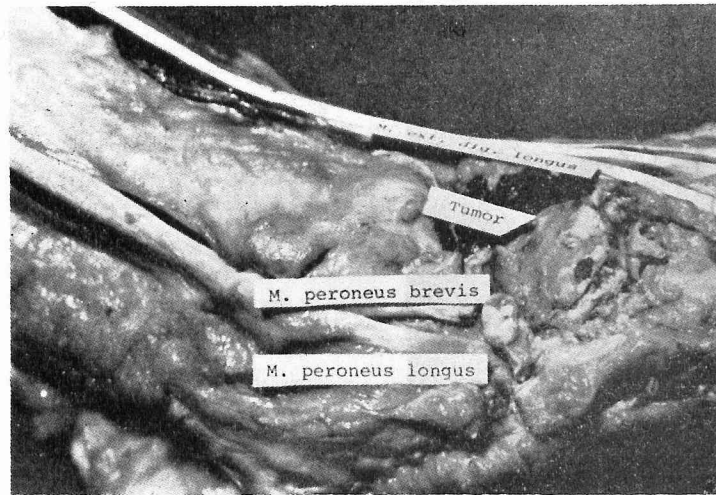


写真 3

報告されている。これらの報告例ではいずれも骨破壊像を伴っている。このように、日常容易に治療されている疾患でも、再発をくり返し<sup>24)</sup>、発生部位の切断を余儀なくされる症例もあり<sup>25)</sup>、また Verruca に対する決定的な治療法も確定されていないことを考え合わせると、非常に古くからある、いわゆる“ウオノメ”のような疾患は、ともすれば安易に扱われがちであるが、いまだ多くの医学上の問題を残しており<sup>26)</sup>、切除などを行なう場合には、常に慎重でなければならないことを教えられた。

#### 文 献

- 1) 高木靖信：疣贅様表皮発育異常症の1例。日本皮膚科学会誌，79：799，昭44。
- 2) 藤田恵一，窪田 明，山内 瞭：伝染性疣贅の種々相。日本医事新報，2378：昭44
- 3) 山田純正：青年性扁平疣贅の治療に関する統計。第35回皮膚科学会東部連合地方会誌，479，昭47
- 4) 北村包彦，森岡貞雄：尋常性疣贅。日本皮膚科全書，Ⅶ：1，287-295，昭32，金原出版株式会社

異常な発育を示した *Verruca plantaris*

- 5) 疣贅治療研究班：疣贅治療の現況. 西日皮膚, 38 : 445-453, 昭51
- 6) 皆見省吾, 相模成一郎, 三浦祐晶, 船橋俊行：疣贅の治療方針. 皮膚科の臨床, 8 : 947-953, 昭41
- 7) 藤田恵一, 窪田 明, 山内 瞭, 太田雍徳, 秋本毅：疣贅に対するプレオマイシン局注療法. 西日皮膚, 33 : 316, 昭46
- 8) 藤田恵一：伝染性疣贅の治療. 皮膚科学会東京地方会第500回記念例会誌, 379-381, 昭47
- 9) 笠井達也：プレオマイシン局注による疣贅の治療. 皮膚科学会誌, 東北地方会第199回例会, 275, 昭48
- 10) 三木吉治, 守屋 節, 中江和子：尋常性疣贅, 青年性扁平疣贅の統計. 日本皮膚科学会誌, 76 : 594, 昭41
- 11) 尾高達雄, 小川靖子：尋常性疣贅の長期観察. 皮膚科紀要, 62 : 240, 昭42
- 12) 徳永信三, 下重孝子：プレオマイシンによる疣贅の治療. 新薬と臨床, 20 : 1682-1684, 昭46
- 13) 田所瑞穂：液体窒素の皮膚科治療への応用. 皮膚科の臨床, 8 : 576-581, 昭41
- 14) 太田雍徳：伝染性疣贅のプレオマイシン療法. 防衛衛生, 17 : 198, 1970
- 15) 野波英一郎：プレオマイシン局注による疣贅治療経験. 日皮会誌, 81 : 904, 昭46
- 16) Greenberg, J.: 2, 4-Dinitrochlorobenzene Therapy for Planter Warts. Arch. Dermatol., 109 : 1974
- 17) Cohen, H. J.: Warts and Ultrasound Therapy. Arch. Derm., 100 : 489, 1969
- 18) Kent, H.: Warts and Ultrasound. Arch. Derm., 100 : 79, 1969
- 19) McLanghlin, R. R. M.: Treatment of Planter Warts. Arch. Derm., 106 : 1972
- 20) 渡辺貞夫：難治性尋常性疣贅の1治験例. 日皮会誌, 80 : 662, 昭45
- 21) 高橋康一：種々の様相を呈した若年性扁平疣贅について. 日皮会誌, 北海道地方会第133回例会, 293, 昭41
- 22) Gardner, M. J. W., Acker, C. D. W.: Bone Destruction of a Distal Phalanx Caused by Periungual Warts. Arch. Derm. 107 : 257-276, 1973
- 23) Hamilton, M.: Verruca Plantalis. Warts, 1 : 549, Dermatopathology
- 24) Pyrhönen, S., Penttinen, K.: Warts-Virus Antibodies and the Prognosis of Wart Disease. The Lancet, Dec. 23 : 1330-1332, 1972
- 25) British Medical Journal : Planter Warts. 1972, 3 : 581-582, 725-726, 1972
- 25) Pringle, W. M.: Treatment of Planter Warts by Blunt Dissection. Arch. Dermatol., 108 : 79-82, 1973

(53. 3. 16 受稿)